

白ねぎの生育を安定させる大苗育苗技術

【研究のポイント】

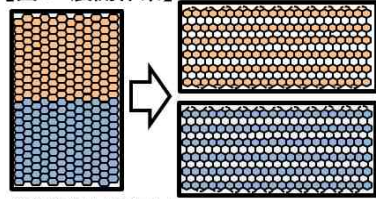
県内の白ねぎ栽培において、4～5月頃に定植する夏越し作型では、梅雨の大雨や夏期の高温・過乾燥などによる生育停滞が問題となっています。そこで、厳しい気象条件下での生育の安定化が期待できる大苗(葉鞘径(白い部分の太さ)が慣行の約1.5倍)を梅雨明け後の7月に定植する、夏越し作型の生育安定に向けた技術の確立を進めています。

【研究の成果】

1) 大苗の育苗方法

- ① チェーンポットに播種した苗を慣行の管理方法で育苗します。
- ② 播種後約1.5か月(葉鞘径3mm程度)の苗を1枚の育苗箱から倍の2枚分に並べ替えて株間を広げる「展開作業」を行います(図1、写真1)。
- ③ ②の苗をさらに約1.5か月間育苗することで、葉鞘径が慣行の約1.5倍の大苗(写真2)に仕立てることが可能となりました。

【図1 展開作業】

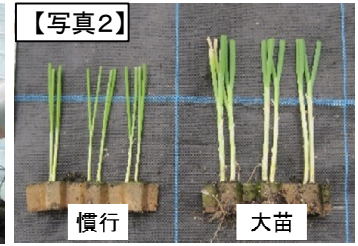


※育苗箱を上から見た図

【写真1】



【写真2】



2) 定植後の生育

大苗を用いた7月定植では、慣行苗よりも生育が優れることが分かりました(図2、図3)。



図2 夏越し作型の作型表

3) 収量

大苗は慣行苗よりも収量が多く、L規格以上の太いネギの割合が増えることが分かりました(図4)。

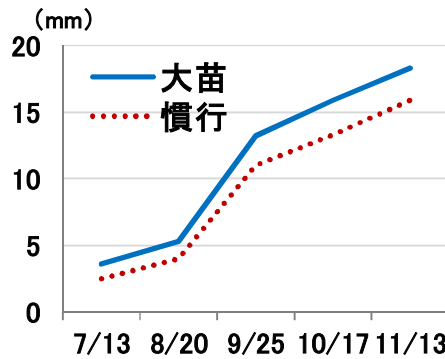


図3 葉鞘径の推移

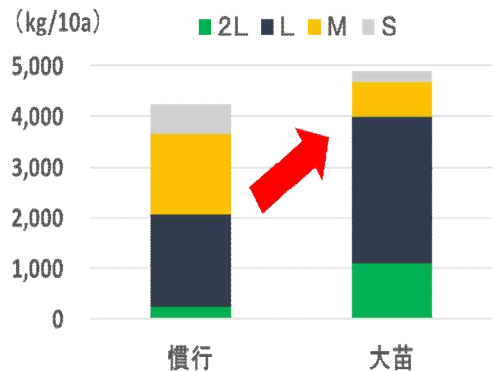


図4 収量

※図3、図4 2018年 品種:夏扇パワー 1穴2粒播種、7月13日定植、12月25日

【生産者の声】

大苗技術を導入した理由は、慣行苗よりも夏場の高温や過乾燥に強く、生育遅延や停滞が少ないとされているからです。

近年の異常気象は、今後もさらに進んでいくものと思われます。初期生育時の傷みを避け欠株を減らし、収穫までの在圃期間を短縮し、収量の安定化を図るには必要不可欠な技術であります。大苗を用いた作型では、慣行の苗と比べて格段にその効果を得ることができました。

苗の展開作業の更なる簡素化と省力化が、今後の改善を希望する点です。

(株式会社オーエス豊後大野ファーム 農場長 和田裕嗣 氏)



【連絡先】

担当： 農林水産研究指導センター 農業研究部 葉根菜類・茶業チーム

TEL： 0974-22-0671 (問い合わせは企画指導担当へ)

住所： 大分県豊後大野市三重町赤嶺2328-8